

患者を生きる

3933

職場で

大阪府豊中市の社会科講師、木下優里さん(37)は2012年6月、市内の不妊治療専門医院「園田桃代ARTクリニック」で検査結果を聞き、がくせんとした。卵巣に残っている卵子の数の目安となるホルモン値が「40歳の平均値ほど」と告げられたのだ。当時30歳。10歳も上だった。

22歳で大学を卒業。熟講師を1年した後、高校時代からの夢だった「社会科の先生」として、府内の私立中高一貫校で働き始めた。24歳の頃、熟講師時代に同僚だ

った明彦さん(38)と結婚した。子どもはほしかったし、いつかできるのが当たり前と思っていた。しかし、授業を受け持った生徒たちが高校を卒業するまで、教えたいと仕事に熱中し、あつという間に時間は過ぎた。

気付けば28歳。そろそろ第1子がほしいと思った。これまで仕事を優先させてきたが、完全に避妊をしていたわけではなかった。健康な男女が、避妊せずに夫婦生活を1年間営んでも妊娠しない場合、「不妊症」と呼ばれる。

「ホルモン値40歳」に動揺

不妊治療①

「ひょっとしたら子どもができにくいのかも……」。不安がよぎり、婦人科の医院に通い始めた。医師の指導のもと、毎月、排卵日近くに、夫婦生活をもつ「タイミング法」を試した。しかし、1年以上経っても妊娠に至らない。医院が通勤ルート上になく、仕事終わりに駆け込む日々にも疲れ、一度は通院をやめた。

半年ほど経って思い直し、夫婦で門をたたいたのが、冒頭の不妊治療専門医院だった。子宮や卵管などの状態を調べる

検査はすべて異常なし。夫も検査で異常はなく、「原因不明の不妊」と診断された。タイミング法を一年以上試していた経緯もあり、院長の園田桃代さん(49)は「スピードアップして、テンポよくいきましょう」と告げた。



結婚後、鳥取旅行に出かけた木下優里さん(右)と夫の明彦さん(左) 2007年12月撮影、木下さん提供

ホルモンの質とは関係しないし、妊娠する可能性を判定するものではない。それでも焦りとショックでいっぱいだった。家に帰って、泣きながら明彦さんに報告した。「別に(卵子が)ゼロやないんやから。残りあるねんから。がんばろう」。動じずに返してくれたその言葉に救われた。

(水戸部八美)

◆5回連載します。

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryu-k@asahi.comへお寄せください。



「患者を生きる」は、医療サイト・アピタル (<http://www.asahi.com/apital/>) でも、ご覧になれます。